

この報告も残すところあと2回。

あやぶまれた生徒たちの健康状態だが、幸い全員がおおむね回復。余力のある者から順次宿舎を出発し、集合時間の10:45まで最後の台北市内自由散策を行う。調子を崩していた者もぎりぎりまで宿舎で休養をとり、残る全員で市内へ向けて出発。帰国前最後の活動は最初から最後まで14人全員で行うことができた。

本日最初の活動はJTB台湾における最後の振り返り。この14人が最初にじっくり顔を合わせた保護者説明会の際にご講演いただいた林田社長の前でグループ毎に最後のプレゼンテーション。日本人に対して日本語でプレゼンをしたこともあってか、中身に対する講評としては、おそらく今までで最も生徒たちのためになる助言をいただけたように感じる。

昼過ぎにJTBを後にし、台北駅へ。そこで小一時間の自由時間。思い思いに昼食を摂ったりお土産を買ったり。そして最後のプログラムである九份・十份ツアーへ。

九份・十份は台北市内から車で小一時間ほど東シナ海方面に向けて走ったところにある山間の集落である。十份は炭鉱、九份は金鉱としてかつて栄えていた町とのこと。それが現在では十份は気球を飛ばして願掛けをするパワースポット、九份は千と千尋の神隠しのモデルの一つとなった異国情緒あふれる提灯街として日本人にも定番の観光地となっている。(修学旅行の高校生をはじめ、いたるところで日本人に出会った。)

我々はまず十份から。2グループに分かれ、4つの側面にそれぞれの願い事を記した気球を空に放ちます。この気球揚げが行われているのは現役で使用されている線路の真上。私たちが滞在していた間にも二度ほど電車がやってきて、その度にそれまで線路上で気球を揚げていた人たちは蜘蛛の子を散らすように線路から逃れていく。日本では到底考えられない光景である。

そして陽も落ちてくるタイミングで最後の目的地九份へ。山地の傾斜に従って作られた細い道を大量の人が行き来しているので、ところどころ人の大渋滞に。そんなわけで当初は14人一列で行動していたのが、途中同じ日本から来ている修学旅行の団体に割り込まれ、離れ離れに。結局分かれた時点で一緒にいた者同士で集合時間まで自由散策することに。

報告者は途中で偶然出くわした生徒2名と本日二度目の小籠包などを食べ、臭豆腐の激臭にむせながら「千と千尋」の世界を歩き回った。

帰る頃には雨も本降りとなり、びしょ濡れになってバスに帰るとそこはまた極寒地獄(曇り止めのためにエアコンを入れる必要があるのだが、こちらの車には暖房がついていないため、必然的に冷房をかけることになる)。体調不良だったものが再び悪化しないかと一抹の不安が過ったものの、無事に宿舎まで帰着することができた。

そして台湾最後の夜はドミトリーの会議室をお借りして、一人ずつこれまでの14日間を振り返るスピーチを。しみりとさせられる場面があったかと思えば、爆笑に包まれる瞬間もあり、この14日間を凝縮したような1時間はあっという間に過ぎていった。

この14人の出会いに心から感謝するとともに、14人が同じような気持ちを抱いていることを、異口同音に確認しあえたことは、何より幸せなことなのだろうと思う。

保護者の皆様、学校の皆様をはじめ、この14人での旅を実現させてくださった全ての方に改めて深く御礼申し上げます。

JTB 台湾林田社長との意見交換



こんな感じで気球を飛ばします



土砂降りの九份



最後の台湾ナイト

